

高崎城下町の形成過程と地域構成

関 戸 明 子・奥土居 尚

- I. はじめに
- II. 高崎城下町の位置
- III. 高崎城下町の形成過程
 - (1) 城下町の移転とその発達
 - (2) 寺院の移転とその配置
- IV. 高崎城下の町人地の地域構成
 - (1) 町人地の機能
 - (2) 地子・役負担の差異
- V. 高崎の城下町プランの特色
 - (1) 城下町プランの類型
 - (2) 町人地の屋敷割
 - (3) 城下町の地域構成
- VI. おわりに

I. はじめに

城下町をめぐる研究はさまざまな分野から活発に行われており、それぞれの固有のアプローチによって研究の深化がみられる¹⁾。城下町の空間形態の分析も歴史地理学の専売特許とはいえない状況になっている。

しかしながら、矢守一彦によって呈示された城下町プランの変容系列に関する類型は、歴史地理学研究の非常に重要な成果であり、多くの影響を与えつつけている。城下町全体を類型化した「戦国期型→総郭型→内町外町型→郭内専士型→開放型」、町人地の町割を類型化した「縦町型→横町型」、町人地の屋敷割を類型化した「江戸型→京型」というそれぞれの変容系列は、特定の城下町の展開過程であるとともに、全国的な城下町の成立時期による展開過程でもある²⁾。その典型的な例が大名の転封による城下町プランの変容にみられる。

井伊氏の場合をみれば、直政が天正18年(1590)、12万石を与えられ、上野箕輪に戦国期型プランの城下町を造り、慶長3年(1598)には上野高崎に移転して総郭型プランの城下町の造営に着手した。その後、関が原の戦いの功で、18万石をもって戦国期型プランの石田三成の居城・近江佐和山に封ぜられた。直政の死後、慶長8年(1603)、彦根に城下町の造営が始められ、大坂冬の陣・夏の陣の後、相次ぐ加封をうけて譜代筆頭の30万石となり、内町外町型プランの完成をみた³⁾。

本稿では、こうした城下町プランの変容系列を念頭に置きながら、井伊氏の築城した高崎を取り上げ、城下町内部のミクロスケールの分析を試み、高崎の城下町プランの変容がどのように読み取れるのか、検討したい。

具体的な考察に入る前に、基本的な史料について述べておきたい。高崎についてまとめた地誌として最も早い時期に成立したものは、宝暦5年(1755)の『高崎寿奈子』⁴⁾で、その後、藩主の命により寛政元年(1789)に『高崎志』⁵⁾が成立した。また明治15年(1882)には多くの史料を収録した『更正高崎旧事記』⁶⁾がまとめられた。これらは、いずれも高崎城下の各町ごとの由来や寺社の縁起、祭礼などを記述している。

一方、高崎城下を描いた絵図で、本稿で活用したものは次のとおりである。

一方、高崎城下を描いた絵図で、本稿で活用したものは次のとおりである。

①元禄16年(1703)「高崎宿倉賀野宿往還通絵図面」⁷⁾。

②年不詳「間部氏当代高崎絵図」⁸⁾。

③延享年間（1744～48）「高崎城内絵図」⁹⁾。

④安政3年（1856）「高崎御城下町並寺社境内等巨細絵図面」¹⁰⁾。

⑤安政3年（1856）「上野国群馬郡高崎御城内外持場惣絵図」¹¹⁾。

⑥慶応2年（1866）「高崎城下絵図」¹²⁾。

このうち①は中山道に面した町屋について、一軒ごとに職業や名前などが記載されたものである。②は管見によれば高崎城下町全体を描いた図としてはもっとも古い時期のもので、侍屋敷地区の屋敷割・町屋地区の町割・寺院の配置について知ることができる。⑥も同様の情報を含みよく知られたものであるが、地図としての精度は低く歪みが大きい。③には城郭とその内外の侍屋敷地区が描かれている。④には町屋地区の屋敷割と支配関係が、⑤にはそれに加えて、侍屋敷地区の屋敷割を含む城下町全体が描かれている。

本稿では、これらの史料を使って城下町の形成過程を考察するとともに、とくに町人地に焦点をあて、その機能と形態について分析を進める。その分析をふまえたうえで、城下町全体の地域構成を呈示することが本稿の目的である。

歴史地理学では、都市空間を復原し分析を行うが、その歴史の変遷・発展過程にはあまり関心がないと指摘されるが¹³⁾、本稿ではできるかぎり、城下町プランの変容について究明していきたい。ただし、上述のように、城下町の成立期に関する絵図史料が残されていないため、間部氏以前の城下町プランについては詳らかにすることができない。しかしながら、高崎については、町人地の町割と屋敷割に関する空間類型についての分析はいまだ行われていないため¹⁴⁾、近世末期の絵図史料に依拠してではあるが、それを明らかにすることは大きな意義を持つ。そしてまた、こうした空間形態に投影された社会構成を解き明かすことにも重要な課題として取り組みたい。

II. 高崎城下町の位置

天正18年（1590）、徳川家康は関東の知行割に着手した。その知行割は細分化され、2万石以下の零細な規模が非常に多かった。その中で、10万石を超えたのは、上野箕輪12万石（井伊直政）、上野館林10万石（榊原康政）、上総大多喜10万石（本多忠勝）の3藩のみであった。この傾向は、全国規模の知行割が行われた慶長8年（1603）以降にもみられた。関東では51藩中、20万石以上の藩は常陸水戸のみ、5万石以上の藩も11藩のみで、いずれも親藩か譜代であった。また、関東の諸藩は頻繁に国替えを命じられ、改廃・移封をくりかえし、さらに幕府の要職に就くことも多く、在地性に乏しかった¹⁵⁾。



図1 明治中期の高崎
明治18年（1885）測量2万分の1「高崎」図幅

表1 高崎藩の歴代藩主と石高の変遷

代	藩主名	石高(万石)	期間	年数
1	井伊直政	12.0	慶長3年(1598)～	2
城代	諏訪頼水	—	慶長5年(1600)～	4
2	酒井家次	5.0	慶長9年(1604)～	12
3	松平(戸田)康長	5.0	元和2年(1616)～	1
4	松平(藤井)信吉	5.0	元和3年(1617)～	2
5	安藤重信	5.66	元和5年(1619)～	2
6	安藤重長	5.66→6.66	元和7年(1621)～	36
7	安藤重博	6.0	明暦3年(1657)～	38
8	松平(大河内)輝貞	5.2→6.2→7.2	元禄8年(1695)～	15
9	間部詮房	5.0	宝永7年(1710)～	7
10～11	松平(大河内)輝貞・輝規	7.2	享保2年(1717)～	32
12	松平輝高	7.2→8.2	寛延2年(1749)～	32
13～19	松平輝和・輝延・輝承・輝徳・ 輝充・輝聴・輝聲	8.2	天明元年(1781)～ 明治2年(1869)	88

『群馬県史 史料編10』(1978)・『群馬県史 通史編4』(1990)・『高崎市史 第3巻』(1968)より作成

こうしたなかで、家康の関東入封時には和田宿とよばれていた土地に、慶長3年(1598)、箕輪12万石の藩主であった井伊氏が移転し、地名も「高崎」と改め城下町を建設したのである。高崎は、烏川と碓氷川の合流点の左岸に広がる、標高約100mの台地上に位置する(図1)。ここは、河川沿いの交通路が交わる要地であったため、古くから宿場として発達した。正長元年(1428)、和田義信が烏川左岸崖上に城を築いてからは和田宿とよばれるようになり、鎌倉街道に沿って、金井・馬上・植横の宿場が形成された¹⁶⁾。天正18年(1590)、豊臣氏の小田原攻めの際に、前田・上杉両軍の攻撃で和田城が落城して和田氏は滅亡し、その後、井伊氏が箕輪から移転したのである。

高崎は、東海道の裏街道として整えられた中山道の宿場ともなり、越後へ通じる三国街道、信濃へ通じる信州街道なども分岐する交通の要所に位置した。表1に示したように、高崎藩もまた多くの藩主が入れ替わり、老中や側用人・大坂城代・寺社奉行など要職に就くものが多かった。石高は、井伊氏の転封後に5万石に落ち込むが、松平(大河内)氏の再入封以後は7.2万石から8.2万石と安定した。ただし、武蔵・下総・越後などにも領地をもち、こうした飛び地を含

んだところに、高崎藩領の特色が見られる¹⁷⁾。

Ⅲ. 高崎城下町の形成過程

(1) 城下町の移転とその発達

ここでは、高崎の城下町の形成過程を、次の三つの時期に分けて述べていく¹⁸⁾。それは、第1期：井伊氏が慶長3年(1598)に箕輪から移転してから元和2年(1616)に酒井氏が転封するまで、第2期：松平(戸田)氏が入封してから享保2年(1717)に間部氏が転封するまで、第3期：松平(大河内)氏の再入封以後、の三つ時期である。そこで、図2と図3を参照しながら¹⁹⁾、記述していきたい。

第1期：箕輪から移転した井伊氏は、高崎城の建設に着手した。和田城の建物は取り壊され、箕輪城の縄張りを規範とし、新たに本丸を中心にして二の丸、三の丸などが建設されていった。家老や重臣などの主要家臣たちの屋敷は広大な三の丸に置かれ、中・下級家臣はその外に屋敷を連ねた。これらの武士団は箕輪から移転し、近世的な街区的内山下として整えられたのである。

町人も武士団とともに箕輪から移され、
れんじゃくちよう きやちよう たまち なかこんやまち もとこんやまち
 連雀町・鞘町・田町・中紺屋町・本紺屋町などの町割が行われた。その基準となったのは、

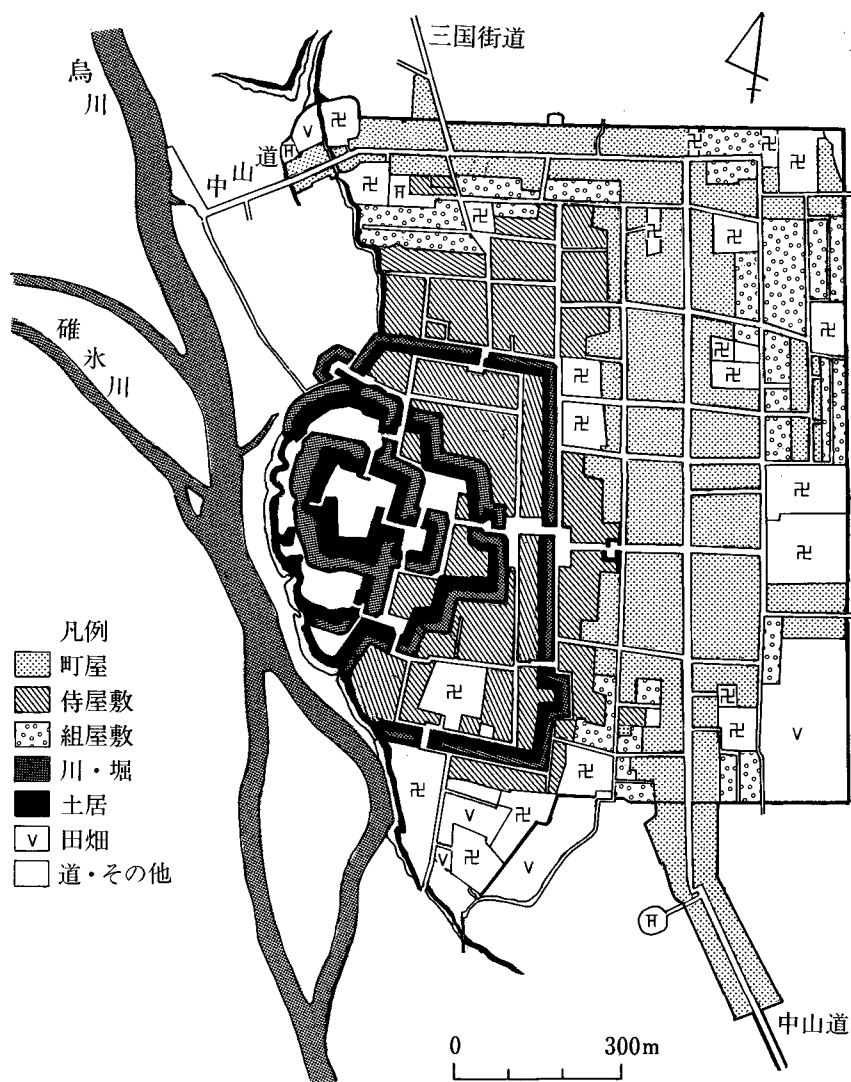


図2 宝永期の高崎の城下町プラン
 (「間部氏当代高崎絵図」より作成)

箕輪においても大手門の前に位置していた連雀町であった²⁰⁾。

また、旧来の和田宿の町人は、新たに設けられた本町や新町²¹⁾に移住させられた。このように、井伊氏直属の町人と在地の町人が統合されることによって、高崎の町人地は形成された。これらの町人地や寺社はすべて「遠構」²²⁾と呼ばれる総構に取り囲まれることによって、形態

的にも城下町の成立をみた。総構からの出入口は7口あり、それぞれ木戸や番所、番屋が置かれた。

そして、築城の際には中山道の整備もおこなわれた。中山道は、南東部から城下に入って通町・白銀町の通りを北上し、北東端近くで西に折れ、西北端で三国街道を分岐して北西に向かっていたのである。例えば、『主図合結記』に

収められた「上野国高崎」の図には、一番東にある南北の通りが主要街路として示されている²³⁾。しかし、井伊氏は関が原の戦いで出陣し、わずか2年ほどで佐和山へ移封され、この時も家臣団はもとより、有力町人や寺院が高崎から移転したため、城下町の造営は一時的に中断したと考えられる。

なお、高崎の伝馬役は、和田宿の町人が移住した本町が負担していたが、慶長7年(1602)からは、田町・^{あらまち}新町も加わり、この3町で伝馬役を負担するようになった。

さらに、2代藩主の酒井家次は、城下町の拡張整備を行い、新たに^{しんでんまち}新田町・^{あかさかまち}赤坂町を創設した。赤坂町には当初給人町という侍屋敷が置かれたが、それを郭内に移し、跡地が町屋となった。また、酒井氏の大坂冬の陣の出兵に際しては、北爪九蔵なる人物も出陣し、これが九蔵町の町名の由来となったという²⁴⁾。そして、中山道の道筋を一筋西の田町・^{あらまち}新町の通りに移動し、街道の整備を行った²⁵⁾。

第2期：酒井氏が転封した後の高崎藩は、享保2年(1717)、間部氏が越後村上へ転封するまで、何度も藩主が入替わった。そのなかで、6代藩主安藤重長は、問屋場を拡張した。それまでは、本町に継場が置かれていたが、往来する人々の増加と荷物輸送の増加にともない、寛永9年(1632)からは本町・田町・^{あらまち}新町の各伝馬町に問屋場を設置し、1ヶ月を上番・中番・下番に分割して問屋を継いさせるようになった²⁶⁾。また、^{みなみちよう}南町の成立をみた。そして、7代

藩主安藤重博は、寛文7年(1667)、中断していた高崎城築城工事を再開した。延宝3年(1675)には、本町・田町・^{あらまち}新町に六斎市の市日を設定し、元禄4年(1691)には、烏川の筏河岸を建設して舟運を開いた。また、宝永6年(1709)には、江木村の分村として江木新田が成立した。こうして安藤氏の時代に藩政の基盤が確立し、高崎城下の戸数と人口は、表2に示したように、享保5年(1720)には1,358軒・5,735人となった。

さらに、9代藩主間部詮房は城下町の拡張整備を進めた。正徳元年(1711)には、本町分として^{とまわちよう}常盤町・^{よつやまち}四ッ屋町、その翌年には、田町・^{あらまち}連雀町・南町の町人が請け負った新喜町がそれぞれ成立した。なお、図2として示した「間部氏当代高崎絵図」には、上記の3町はみられず、その逆に、正徳元年に三の丸の外へ移転した興禅寺がみられる。このことは、この絵図が間部氏の入封した宝永7年(1710)以前の状況を示していることを示唆する。

第3期：松平輝貞の再入封から明治期に至るまで、高崎は約130年間にわたる松平(大河内)氏の支配が続いた。宝暦6年(1756)に^{あいおいちよう}赤坂町分として相生町が成立した。これによって、四ッ屋町にあった木戸・番屋も移され相生町口と呼ばれるようになった。また、この時期には、もともと組屋敷だった所が町屋となり、新たな町として^{かたまち}嘉多町・^{しよくにんまち}職人町が成立した。

高崎城下の戸数と人口については、表2に示したように、享保5年(1720)から明治2年(1869)まで目立った増減なく推移している。こうした戸数と人口をみるかぎりでは、この時期は発展傾向を示すとはいいがたい。これは度重なる大火も影響していると考えられる²⁷⁾。

高崎藩の領内人口と城下町人口を明治12年(1879)のデータでみると、飛び地を除く領内人口54,958、飛び地を含む領内人口95,792に対して、城下町人口は16,173であり、その比率はそれぞれ29.4%、16.9%となる²⁸⁾。この数値は全国的な平均値と比較するとかなり高く、高崎では城下町に人口が集中していた。それは、高崎

表2 高崎城下における人口の推移

時代	戸数	人口
和田時代	724	—
貞享4年(1687)	881	5,734
享保5年(1720)	1,358	5,735
明和期(1764-72)	1,282	7,830
天明4年(1784)	1,411	6,458
享和元年(1801)	1,369	6,516
明治2年(1869)	1,597	6,087

『高崎市史 上巻』(1927)・『高崎市史 第3巻』(1968)などより作成。

表3 高崎城下における寺院一覧

	寺院名	開創年・移転年*	寺領	席順
和田氏以前	1 a 光明寺	至徳2年(1385)	11	11
	1 b 庚申寺	文明2年(1470)	—	23
	1 c 玉田寺	永正元年(1504)	—	7
	1 d 善念寺	天文9年(1540)	—	13
	1 e 普門寺	天正3年(1575)	—	21
	1 f 覚法寺	天正8年(1580)	—	14
	1 g 竜宝寺	天正8年(1580)	—	22
井伊氏の時代	2 a 延養寺	慶長3年(1598)*	12	10
	2 b 石上寺	慶長3年(1598)*	23	2
	2 c 恵徳寺	慶長3年(1598)*	15	3
	2 d 正法寺	慶長3年(1598)*	—	18
	2 e 法華寺	慶長3年(1598)*	—	16
	2 f 大信寺	慶長3年(1598)*	107	1
	2 g 安国寺	慶長3年(1598)*	12	9
	2 h 竜広寺	慶長4年(1599)*	13	6
	2 i 大雲寺	慶長4年(1599)*	15	4
	2 j 金剛寺	慶長4年(1599)*	—	20
	2 k 慈上寺	慶長5年(1600)*	—	28
酒井氏以降	3 a 永泉寺	慶長14年(1609)*	—	26
	3 b 天徳寺	慶長15年(1610)*	—	25
	3 c 長松寺	寛永期(1624-43)*	10	12
	3 d 法輪寺	慶安元年(1648)*	—	15
	3 e 唐沢寺	慶安3年(1650)*	—	24
	3 f 清海寺	明暦2年(1656)	—	27
	3 g 真応寺	寛文11年(1671)	—	17
	3 h 威徳寺	宝永期(1704-10)	—	—
	3 i 大染寺	宝永期(1704-10)	—	—
	3 j 興禅寺	享保13年(1728)*	15	5
	3 k 真福寺	不詳	—	19
	3 l 向雲寺	不詳	12	8

寺領(単位:石)は『高崎寿奈子』(1755)。

寺院社人席順は「高崎町方私記」(1818-)。

その他は『高崎志』(1789)より作成。

藩領内における高崎以外の町の発達が不十分であったこと、そして宿場町も兼ねた高崎の領内における中心性の高さを裏付けるものであろう。

(2) 寺院の移転とその配置

井伊氏の箕輪から高崎への移転にともない寺院も移された。『高崎志』(1789)には30寺院が記されており、これらの一覧については、表3にまとめ、その位置は図3に示した。この表で*をつけて移転年を示した寺院のうち、赤坂村金井から移転した長松寺(3c)、芝崎村から移転

した唐沢寺(3e)、三の丸から移転した興禅寺(3j)以外は、すべて箕輪から移転したものである。

多くの寺院のうち、和田氏の時代あるいはそれ以前から存続していたものは7寺院である。これらの寺院は、井伊氏の入封後も境内を縮小されながらも継承された。こうした寺院の配置を図3でみると、城郭外に分散していることがわかる。なお、和田氏の菩提寺であった興禅寺は、正徳元年(1711)に地替えが行われ、その跡地は屋敷とされ²⁹⁾、さらに最終的には天保10年(1839)に現在地に移転したが、その間、境内と伽藍はかなりの縮小をみた。

また、箕輪からの移転は14寺院を数えたが、永泉寺(3a)・天徳寺(3b)・法輪寺(3d)以外は、すべて井伊氏の城下町建設の際に移った。このうち、石上寺(2b)はかつての箕輪城主の長野氏によって城の鬼門除けとして建立されたが、高崎への移転に際しても、城の鬼門に当たる北東の地へ建てられ、代々の城主の祈願所となった。また、恵徳寺(2c)・大信寺(2f)・安国寺(2g)・竜広寺(2h)・大雲寺(2i)といった大寺院は、城下町の外縁部、街道の出入口など、軍事上、重要な場所に計画的に配置されたことが読み取れる。寺領や寺院社人席順からみた格付けでも、箕輪から移転した寺院が重視されたことが理解できよう。なお、井伊氏の転封にともない佐和山さらに彦根に移された寺院に、大信寺・安国寺・大雲寺がある³⁰⁾。いずれも高崎にも残されているが、とくに箕輪で井伊氏の菩提寺であった安国寺が、大手門を正面から守る位置に置かれていたことは、井伊氏による町割の時に、大手通の方向が重視されたことを傍証するといえる。

さらに、酒井氏の時代以降に成立した寺院には、安藤氏の時に総構の外から内へ移ったと伝えられる向雲寺(3l)、松平(大河内)氏の再興した威徳寺(3h)と大染寺(3i)以外は小さな規模のものが多く、町屋地区に点在することがわかる。

なお、神社については、箕輪から勧請された

ことが明らかであるのは、新紺屋町の上諏訪社、
新町の下諏訪社のみで、大半は和田氏の時代も
しくはそれ以前よりあった神社や町の発達にと
もなって創建されたものであり、寺院の配置の
計画性の高さと対照的である。

このように、城下の町割の際に寺院が計画的
に配置されたことによって、寺院は、領主や家
臣および領民の精神的な紐帯、武士の集結地、
火除け地、町人の避難地などの機能を担うこと
になったのである。

IV. 高崎城下の町人地の地域構成

(1) 町人地の機能

高崎城下町では、鍛冶町・鞆町・檜物町・白
銀町・本紺屋町などの職人名に由来する町名が
多い。ここでは、そのような町人地はどのよう
な機能を有していたのか、職業構成などから検
討してみたい。以下では、町人地を、総構内で
中山道沿い・中山道より城郭側に位置する内縁
部・中山道より総構側に位置する外縁部・総構

表4 宝暦期における高崎城下の商人・職人の業種

町名	商人・職人の業種
赤坂町	茶屋 質屋 攤・端午のやり人形卸店 醬油屋 本道医師 馬医師
本町	旅籠屋 茶屋 質屋 小問屋 太物屋 絹屋 油屋 薬屋 塩屋 造酒屋 醬油屋 銭湯 本道医師 針医師
中山道沿い	九蔵町 穀問屋 塗物屋 焼物屋 菓子屋 醬油屋 鉄物屋 銭湯 針医師 田町 両替屋 秤座の出店 穀問屋 肴問屋 小問物問屋 太物屋 呉服屋 絹綿屋 書物屋 判木屋 縫箔屋 仕立屋 張屋 造華師 絵師 弓師 三味線張替師 俳諧宗匠 謡・手習・学文・笛・太鼓指南所 造酒屋 酢醬油屋 鋳物屋 本道外科
連雀町	穀問屋 紙店 薬屋 油屋 小問物屋 太物屋 糺屋 仏師 本道医師 針医師
新町	旅籠屋 質屋 穀問屋 小問物屋 造酒屋 石屋 乗物師 銭湯 座頭
中山道の内縁部	新紺屋町 青物屋 古物屋 酒屋 紺屋 表具師 外科医師 寄合町 煙草問屋 煙草屋 五器碗屋 縫箔屋 桶屋 本道医師 座頭 中紺屋町 質屋 青物屋 古物屋 紺屋 造酒屋 佐官 桶屋 檜物屋 表具師 破魔弓・羽子板・轆りやり職人 手習の師 本道医師 鞆町 質屋 青物屋 干物屋 造酒屋 鞆師 研師 柄巻師 金具師 座頭 本道医師 檜物町 青物屋 肴屋 檜物屋 本道医師 鍛冶町 鍛冶屋 前栽町 菓子屋
中山道の外縁部	羅漢町 職人 座頭 本紺屋町 紺屋 造酒屋 銭湯 外科医師 白銀町 穀問屋 表具屋 通町 茶屋 質屋 小問物屋 菓子屋 酒屋 砂賀町 本道医師 職人町 大工 磐撃町 眼医師
総構の外	常盤町 茶屋 四ッ屋町 針医師 新田町 乗物屋 酒屋 紺屋 南町 茶屋 質屋 酒屋 味噌屋 塩屋 新喜町 茶屋

注)「茶屋」には腰掛茶屋を含む。「その他」の記載は除く。

『高崎寿奈子』(1755)より作成。

の外部に区分し、表4によって分析を進めている。

総構内で中山道に面する町は赤坂町から新町までの6町である³¹⁾。伝馬役を負担した本町・田町・新町のうち、本町には各種の小売業のほか、旅籠屋が集積し、高崎の宿場機能の中心を担った³²⁾。高崎宿の札の辻は本町にあったが、この高札は問屋の梶山氏の預かりであった。田町には両替屋や各種の指南所のような広域に影響を及ぼすもの、穀問屋・肴問屋・小間物問屋といった卸売業、太物屋・呉服屋などの小売業など、様々な業種が存在し、商業的機能の中心を担った。新町には旅籠屋が置かれ、本町の宿場機能を副次的に支え、また、質屋・穀問屋・小間物屋などの商人が存在した。この本町・田町・新町では、延宝3年(1675)、それぞれの市日を、3と8、5と10、2と7とする六斎市が設定された。その後、田町の市は、元禄3年(1690)に絹の専売権を与えられ、明治期まで大いに賑わうが、本町・新町では市立は年に二回と衰退する³³⁾。これは、市が常設店舗の機能に吸収されたことを示すといえよう。

連雀町には、箕輪から移住した有力町人がおり、惣町の第一とされた町で、数度の火災で廃止されるまで高崎宿の本陣も置かれていた。ここでは、米穀商が目立つものの、商人とその業種の数はその程多くない。それは、大手通に面する商家において売買する品が清潔な物のみと命じられたため、そこで、下仁田紙の専売権を与えられていた³⁴⁾。また、九蔵町・赤坂町には、茶屋・穀問屋・醤油屋などがみられるが、その業種はそれほど多様ではない。

次に、中山道の内縁部の町には、職人が多いことがわかる。新紺屋町と中紺屋町には、町名の由来の通り、多くの紺屋職人が存在した。また中紺屋町の東側の町は古着町とよばれ、多くの古着屋があった。寄合町には、煙草問屋や五器碗の製造・販売業が、鞆町には、町名由来の通り、鞆師・研師・柄巻師・金具師などの職人が存在した。この新紺屋町から鞆町にかけてが、工業的機能の中心を担っていた。

一方、櫛物町には、青物屋・肴屋・櫛物師がみられ、鍛冶町には、町割当初より鍛冶師が居住したが、その後、他町へ移住したためその数は減少した。その跡には、米見役人の長屋が建ち、米見町と呼ばれるようになった。前裁町には、わずかに菓子屋が存在したのみである。これらの町は、商工業が混在し、郭内に近いため、奉行所・組長屋・牢獄などと近接し、部分的に、行政的機能への転換がなされたと考えられる。

さらに、中山道の外縁部の町についてみると、商人・職人の業種があまり多くないことがわかる。磐撃町は文字通り時宗の半僧半俗の鉦叩の集住する町であった。白銀町も町名由来の通り、白銀師が居住していたが、後年に白銀師は鞆町へ移住し、工業的機能は衰退した。通町には、井伊氏の町割の時に中山道が通っていた。そのため、旧中山道沿いには商家が多く、酒屋・質屋・小間物屋・菓子屋・茶屋といった様々な業種がみられた。職人町には、多くの大工職人が居住し、このことから別名大工町とも呼ばれた。

総構の外に位置する常盤町・南町・新喜町では、茶屋が多い。これは、高崎宿の出入口の町として、旅人相手の商売が成立したためと考えられる。また、新田町を含めた総郭外の町では、作人が数多くみられ³⁵⁾、農業を兼業した町であったといえる。なお、総構の外に広がる耕地の一部は赤坂村として村立てされており、民家はなく、高1,234石余が課せられていた。この地の耕作には、高崎の惣町があたった³⁶⁾。

(2) 地子・役負担の差異

さらに、ここでは、地子と役負担の差異を検討していきたい。図4は城下の支配関係を示したものである。これによれば、まず地子免除の町屋として、本町・田町・連雀町・新町・磐撃町・職人町があげられる。このうち、本町・田町・新町は既に述べたように伝馬役と問屋継立を勤める町である。また本町には佐渡から運ばれた金を保管する御金蔵が置かれていた³⁷⁾。連雀町は箕輪から有力商人が移転した大手門前の町であり、本陣やそれが焼失したのちは使者取次

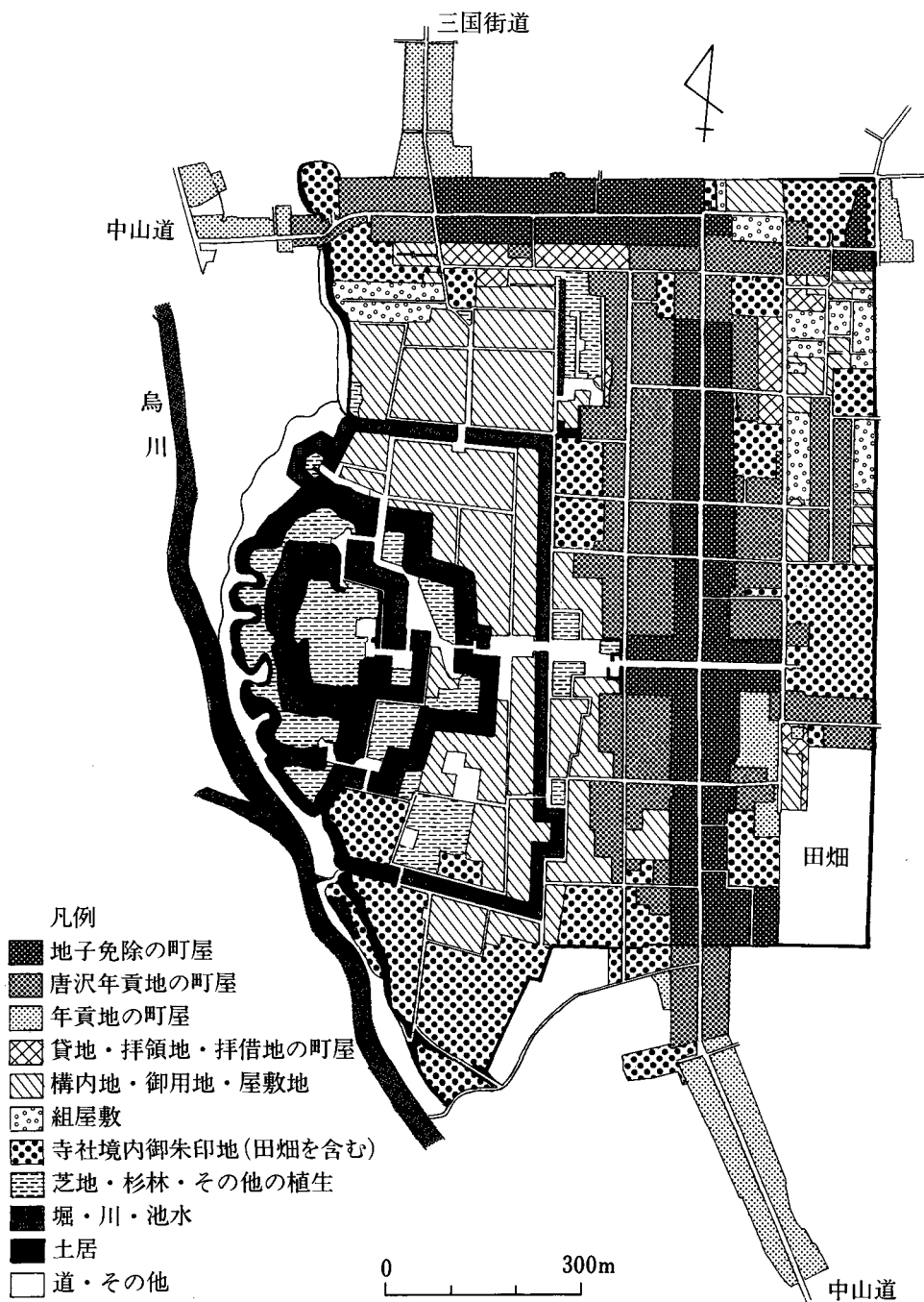


図4 安政期の高崎城下の支配関係
 (「高崎城内外持場惣絵図」より作成)
 絵図の一部については簡略化して示した。

所が置かれ、榎郭の米蔵屋根葺人足などを担った³⁸⁾。また、磐撃町は鉦叩の町で慶長の町割当初から、職人町は組屋敷跡地に大工職が置かれて成立した町で天和2年(1682)から、それぞれ無年貢地として位置づけられた。

次の唐沢年貢地とは、安藤氏の家来、唐沢所左衛門が地子年貢を厳しく取り立てたため、地子を出すことを唐沢と俗称したことが定着したといわれるもので、大部分の町屋がこれに該当する。この地子銭は、表5のように、文化期には鞆町の22貫510文から砂賀町の3貫579文まで、それぞれの屋敷地に応じ、地子免除の本町・田町・連雀町・新町でも町裏の部分は地子を含めていた。この基準は、一間に付き622文6分、但し一坪に付き4文9分8厘8毛と記されている³⁹⁾。

表5 文化期における高崎城下の役・地子の負担

中山道の沿い	赤坂町		地子銭12貫929文／米年貢
	本町	伝馬役	地子免／地子銭1貫406文
	九蔵町	自身番	地子銭26貫850文
	田町	伝馬役	地子免／地子銭11貫661文
	連雀町	自身番	地子免／地子銭7貫111文
中山道の内縁部	新町	伝馬役	地子免／地子銭2貫986文
	嘉多町	自身番	冥加金10両10匁
	新紺屋町	自身番	地子銭15貫956文
	寄合町	自身番	地子銭6貫580文
	中紺屋町		地子銭10貫388文
	鞆町		地子銭22貫510文
	檜物町		地子銭18貫348文
	鍛冶町		地子銭6貫788文
中山道の外縁部	前栽町		地子銭4貫410文
	羅漢町	遠見番	地子銭17貫134文
	本紺屋町		地子銭7貫639文
	白銀町		地子銭6貫837文
	通町	遠見番	地子銭5貫934文
	砂賀町		地子銭3貫579文
総構の外	職人町		無年貢
	磐撃町	遠見番	無年貢
	常盤町		米年貢
新喜町	相生町		米年貢
	四ッ屋町		米年貢
	新田町	自身番	地子銭14貫263文／米年貢
	南町		米年貢
	新喜町		米年貢

「高崎町方私記」より作成。

また、冥加金を差し出す職人と商売には、鍛冶職・刻煙草・紺屋・提灯屋・傘屋・髪結・質屋・酒屋・湯屋などがあり、白銀町と鞆町には役銀が課せられていた⁴⁰⁾。なお鞆町では、研物御用や火之見番人や鐘撞の役も担っていた⁴¹⁾。

年貢地の町屋としては、常盤町・相生町・四ッ屋町・南町・新喜町と赤坂町・新田町・砂賀町の一部があげられる。これらは、赤坂町・砂賀町の一部を除いて、すべて総構の外に位置する新しい町である。また唐沢年貢地である新田町も成立当初は米年貢を納めていたが、寛文4年(1664)から地子銭を出すように変わった⁴²⁾。それゆえ、総構の外に新たに成立した町は、基本的には米年貢を納める町と位置づけられる。

さらに、貸地・拝領地・拝借地には、嘉多町・弓町の一部・十人町があげられる。これらはいずれも組屋敷が転換されたものがある。このうち、嘉多町には46軒の町屋があり、冥加金が納められているが、弓町・十人町には町屋はなく、九蔵町と田町の拝借地がみられるのみである。

その一方で、貸地ではなく、組屋敷となっているのは、椿町・弓町の大部分・新町と赤坂町の南部の城代組屋敷で、これらは防御的な機能を果たすため、配置されたと考えられる。こうした組屋敷の周辺と三の丸周辺が御用地などに位置づけられており、本丸・二の丸の大半は芝地などになっていることがわかる。

なお、図4によれば、大手の枳形木戸周辺や新紺屋町の西にも芝地がみられる。前者には、侍屋敷があったが、享保12年(1727)の火事を契機に、後者には、代官の屋敷があったが、文化9年(1812)の火事を契機に、それぞれの地を火除け地としたという⁴³⁾。また、寺院の配置については既に述べたが、三の丸にあった和田氏菩提寺の興禅寺跡が芝地になっていること、その逆に、松平(大河内)氏の再興した威徳寺(3h)が三の丸に大きな御朱印地を占めていることを、指摘しておきたい。

V. 高崎の城下町プランの特色

(1) 城下町プランの類型

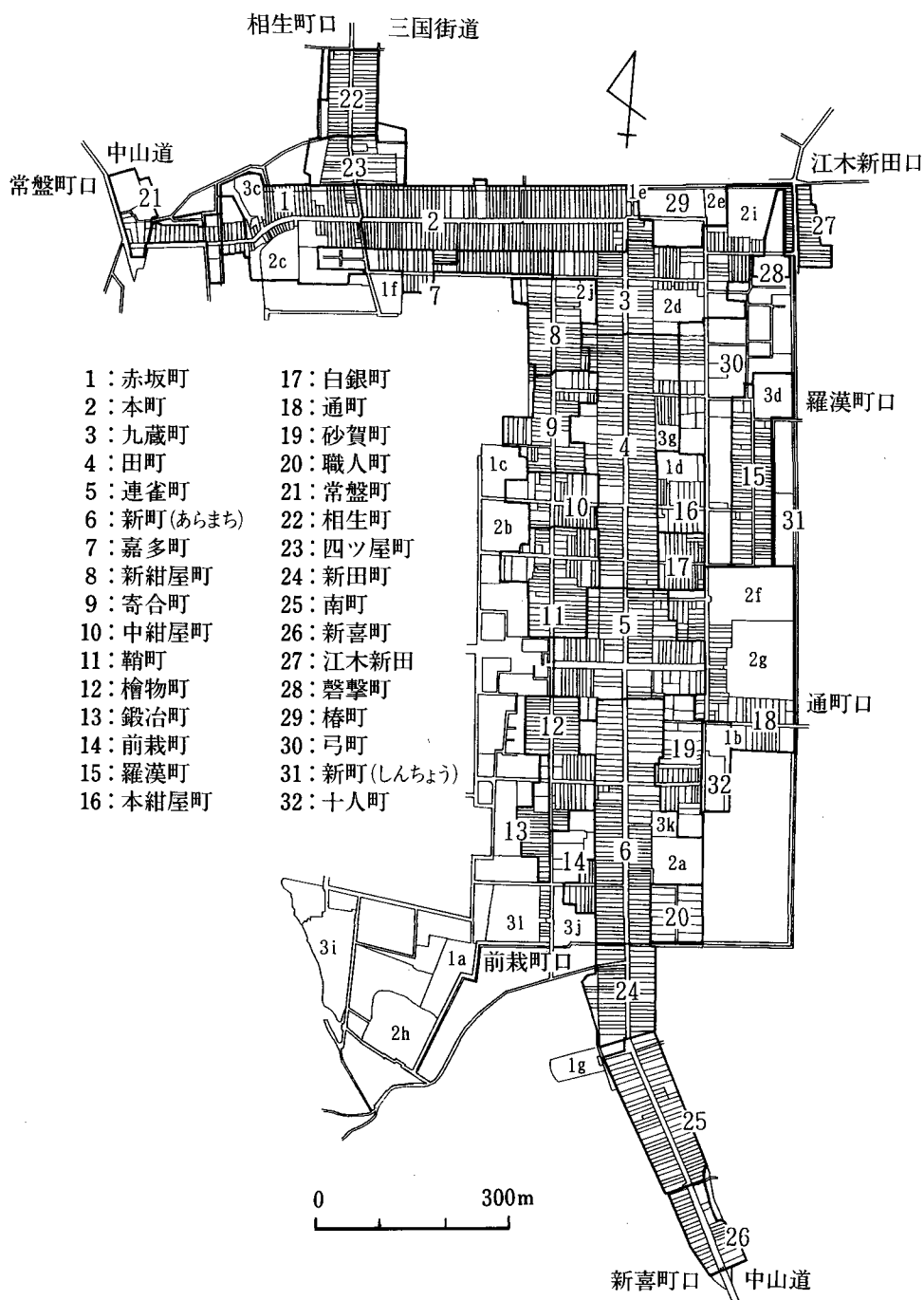


図5 安政期の高崎城下の町割と屋敷割り

(「高崎城下町巨細絵図」より作成)

図中の番号1～27は表6の町名に、記号1a～31は表3の寺院一覧と対応。

高崎の城下町プランは、図2からわかるように、「遠構」と呼ばれる総構によって町全体が収められる総郭型である。三の丸とそれに接する場所に侍屋敷地区、その外側に町屋地区、総構に近接する場所に組屋敷地区・寺町地区というように地域的に分化している。そのなかには、田畑をも含んでおり、戦国時代からの移行期にみられる城下町の特徴を備えている。

さらに、他の城下町がたどってきたような城下町プランの変容が、以下のような点で高崎においても認められる。井伊氏の転封以降に成立した新田町・南町・新喜町・相生町・常盤町は、いずれも街道に沿って総構の外に配置されたこと。その総構は次第に機能を失い、本町の裏などでは宅地化が進んだこと。また、もともと組屋敷だった場所に嘉多町・職人町などが成立し、組屋敷地区と町屋地区との区分が薄れたこと、などである。

さらに、町人地のプランについて、安政3年(1856)の「高崎城下町巨細絵図」を用いて、分析を進めていきたい。

高崎では、図5に示されるように、九蔵町から連雀町にかけては基盤型に近いブロックが部分的にみられるものの、大半は短冊型ブロックが卓越する。その一方で屋敷割については、通りに面する二辺のみに間口を向ける京型よりも、多くは四辺に間口を向けている江戸型となっていると判断される。大手門の前には、寛文9年(1669)に開かれた枳形木戸があり、この木戸より東の安国寺に向かって大手通がのびている。その大手通と中山道は連雀町で交差している。この交差している地区における屋敷割をみると、中山道に間口を向けていると考えられる。これは、中山道が大手通よりも優位性を持つ街路であることを示している。九蔵町・田町・新町においても、大手門に対して横方向の中山道が優位であることは明らかであり、高崎は横町型プランに属するといえる。

しかし、慶長3年(1598)、井伊氏によって連雀町から始められた高崎の町割は、この町がかつては大手門前より枳形木戸の間を一丁目、そ

れより東の大道の間を二丁目、通町境に至るまでを三丁目とし⁴⁴⁾、正面に安国寺を配したように、当初は大手通を重視する豎町型プランが優位にあったといえる。さらに、中紺屋町は「昔は元紺屋町ト一町也」、白銀町は「元ハ鞆町ノ分也」とあり⁴⁵⁾、それぞれ中山道の移動によって分断されたと考えられる。分断前の当初のプランは、連雀町、鞆町と白銀町、本紺屋町と中紺屋町の町域は、大手通の方向に縦に長くなっていたと推察される。

この時期には、徳川氏の全国支配が確立されていなかったため、領国の中心としての城と城下町の存在を強調し、町屋の中心と周縁部の間の階層的格差の生じやすい豎町型プランを展開しようとしたと考えられる。しかし、慶長8年(1603)の徳川政権の発足とともに、五街道の本格的整備が進められていったなかで、中山道を町人地の中央を貫くように一筋東へ移動させ、経済効果を重視した横町型プランへ推移したといえよう⁴⁶⁾。

(2) 町人地の屋敷割

さらに、町人地の屋敷割について考察するため、安政3年(1856)の「高崎城下町巨細絵図」から読み取れる町屋規模について表6にまとめた。ただし、椿町・弓町・新町・^{しんちよう}十人町の4町は組屋敷、磐撃町は鉦叩で構成された町であり、間口の記載された町屋がないため、ここでは考察の対象から除外した。以下では、前章と同様に、総構内で中山道沿い・中山道の内縁部・中山道の外縁部・総構の外部に区分し、図5と表6によって分析を進めていく。

中山道に面した町は両側町を構成する。赤坂町の屋敷割の規模は、間口2～3間の小さな町屋が多く、奥行きも短い町屋が数多く見受けられる。本町の町屋軒数は、城下町最大である。間口3～4間の町屋が多く、奥行きが長く統一的で、計画的に構築されたことを物語っている。九蔵町では、中山道に面する町屋は全軒数の半分以上で、残りの町屋は、新紺屋町に至る西横丁と磐撃町に至る東横丁に面した場所に存在す

表6 安政期における高崎城下の町屋の規模

	町名	合計 軒数	3間 未満	3～ 4間	4～ 5間	5～ 6間	6～ 7間	7～ 8間	8～ 9間	9～ 10間	10間 以上
中山道の 沿い	1 赤坂町	80	39	23	5	4	5	2	1	-	1
	2 本町	139	15	103	6	6	6	-	-	1	2
	3 九蔵町	96	7	65	9	3	8	-	2	1	1
	4 田町	120	3	83	8	6	17	-	-	1	2
	5 連雀町	77	1	41	11	6	9	1	1	5	2
	6 新町	103	-	80	10	2	8	1	1	1	-
	小計	615	65	395	49	27	53	4	5	9	8
中山道の 内縁部	7 嘉多町	46	6	27	4	3	4	-	1	1	-
	8 新紺屋町	43	7	14	6	3	5	4	-	2	2
	9 寄合町	58	6	27	9	9	4	-	1	-	2
	10 中紺屋町	31	1	18	1	5	4	1	-	-	1
	11 鞆町	72	8	38	9	4	7	1	1	2	2
	12 檜物町	59	8	36	11	2	-	-	1	1	-
	13 鍛冶町	22	1	11	6	-	-	-	-	-	4
中山道の 外縁部	14 前裁町	11	2	3	4	1	1	-	-	-	-
	小計	342	39	174	50	27	25	6	4	6	11
	15 羅漢町	70	22	31	3	4	7	2	1	-	-
	16 本紺屋町	20	4	-	11	1	-	-	2	-	2
	17 白銀町	31	7	19	5	-	-	-	-	-	-
	18 通町	44	11	15	8	4	1	2	2	-	1
	19 砂賀町	30	5	12	1	9	2	-	-	-	1
総構の 外部	20 職人町	14	-	-	-	-	12	1	1	-	-
	小計	209	49	77	28	18	22	5	6	0	4
	21 常盤町	16	1	7	7	-	-	-	-	-	-
	22 相生町	41	3	24	9	3	2	-	-	-	-
	23 四ッ屋町	22	8	8	-	2	2	-	1	1	-
	24 新田町	40	8	17	7	6	1	1	-	-	-
	25 南町	63	-	48	2	-	12	1	-	-	-
合 計	26 新喜町	29	-	20	4	1	3	1	-	-	-
	27 江木新田	19	-	12	7	-	-	-	-	-	-
	小計	230	20	136	36	12	21	3	1	1	0
合 計		1,396	173	782	163	84	121	18	16	16	23

注) 軒数は間口が記載されている町屋のみ数えた。「高崎城下町巨細絵図」より作成。

る。多くの町屋は間口3間で、中山道に面する町屋においては奥行きも長く統一性がみられる。しかし、それ以外の屋敷割には、統一性がみられない。

田町では、間口3間の町屋が多く、奥行きが長く統一性が強くみられる。有力な町人が居住していたと考えられる間口の大きな町屋が多い。連雀町は中山道とそれに交差する大手通に面し

ており、複雑な屋敷割がなされている。中山道の道幅は21尺であるが、大手通の道幅はそれよりも大きく、その両側には水路が引かれている。多くの町屋の間口は3～4間であるが、間口が6間以上ある町屋も18軒と総軒数の2割を上回る。新町では、間口3間の町屋が多く、連雀町に近い部分では大きな区画がみられるが、南へ行くと間口が小さくなる。

中山道の内縁部の町のうち、嘉多町・鍛冶町は片側町である。嘉多町はもともと組屋敷があった場所で、明和8年(1771)に拝借地となった。三十三間長屋とも呼ばれ、間口と奥行きに統一性がみられる。一方の鍛冶町では、町の北側には10間以上の間口を持つ町屋が4軒みられる。

新紺屋町には、大手門より北に向かう道に面した大きな間口の町屋が多く、統一性がみられる。寄合町・中紺屋町・鞆町・檜物町には、間口3～4間の町屋が多いが、なかには大きな間口の町屋もみられる。ほとんどの町屋が南北方向の道に面するが、脇道が交差する中山道側では、その脇道に面する町屋がみられ、複雑な屋敷割がなされている。鞆町の西横丁は、かつては研町とぎまちといわれた。このように豎町型プランの形態の名残を読み取ることができる。前裁町は下横町とも呼ばれ、町屋軒数が最も少ない。また、向雲寺(3l)の門前には、御朱印地に長屋が開かれていることがわかる。

中山道の外縁部の町のうち、羅漢町は町屋が70軒と多く、法輪寺(3d)の西側から南に向かう道に面しており、間口・奥行きとも小さい。それに対して、本紺屋町は、中紺屋町から東に向かう道に面しており、間口・奥行きとも大きく、統一性がみられる。

白銀町・通町・砂賀町には、東西方向の道に面する町屋が多いが、なかには、旧中山道に面する町屋もみられ、複雑な屋敷割になっている。多くの町屋は間口・奥行きとも小さいが、通町口に向かう東西方向の道に面する町屋は、間口・奥行きとも大きく、統一性がみられる。また、安国寺(2g)門前には小さな区画の長屋がみられる。一方、組屋敷から町人地に転換された職人町は、間口6～8間と広く、奥行きも長い。この町は、城下町のなかで、最も遅く町割されたので、非常に計画性の強い屋敷割が残っている。このほか、磬撃町の西側には大雲寺(2i)持ちの長屋が連なっている。

総構の外部の町は両側町となっているが、唯一の例外は常盤町で片側町である。これは、享保期の火災によって、中山道の南側が火除地と

されたためである。多くの町屋は間口3～5間で、奥行きは短いが統一性がみられる。三国街道沿いの町では、相生町の町屋は間口・奥行きに統一性がみられるが、四ッ屋町の町屋は間口・奥行きともばらつきが大きい。

中山道に沿って南にのびる新田町・南町・新喜町では、間口2～4間の町屋が多く、奥行きがほぼ等しく、統一性がみられる。なかでも、南町に比較的間口の大きな町屋がみられる。このほか、江木新田では、前橋に向かう道に沿って町屋が連なる。

以上のように、高崎城下町は横町型プランの町割をもつが、町割当初に採用したと考えられる豎町型プランの名残もみられる。在地の町人の移転した本町や箕輪から有力町人が移転した連雀町・田町では、他の町人地の屋敷割と比較し、大きな区画を持つ場合が多く、町相互の序列が認められる。また、各町の屋敷割は、間口3間とその倍の6間のものが多く、統一性をもって行われていたことが指摘できる。

城下町建設当初の屋敷割の基準については、詳らかではないが、正徳3年(1713)の道中奉行の通行に際した軒数の問い合わせに対して「新町分小間口三百六拾五間 此屋敷数六拾軒与小間五間 但し六間ヲ以壹軒与定」⁴⁷⁾とあること、宝暦9年(1759)には連雀町と三つの伝馬役の町への戸数の問い合わせに対して「但六間壹軒前」⁴⁸⁾とあること、嘉多町の町屋借地の冥加金は間口6間が基準であったこと⁴⁹⁾などから、この数値が意味を持っていたことは間違いなからう。

(3) 城下町の地域構成

以上の考察の結果、高崎城下町の地域構成は図6のようにまとめられる。

まず、城郭内は本丸・二の丸と三の丸に区分される。本丸・二の丸は公用地で占められ、三の丸には、寺院と重臣の侍屋敷が置かれている。

城郭を除く総構内には、中山道より城郭側に位置する内縁部、中山道沿いの中心部、中山道より総構側に位置する外縁部に区分される。

内縁部には、大手門の左右に位置する町奉行

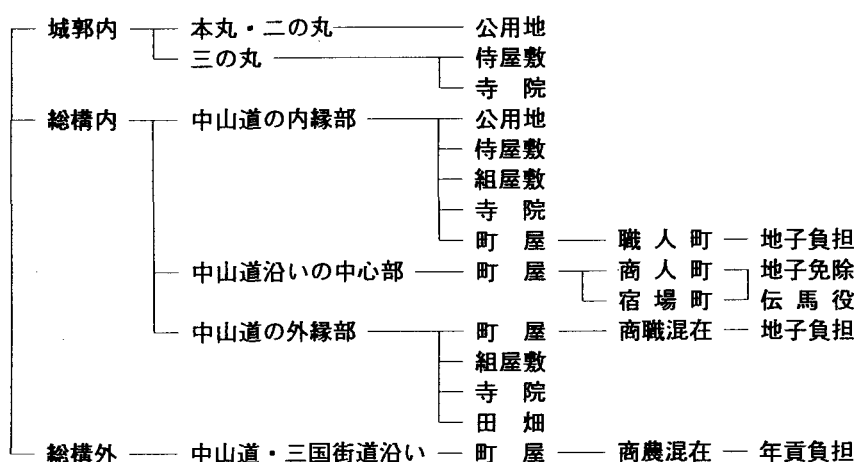


図6 高崎城下町の地域構成

所をはじめ、米見役人と山方役人の長屋、馬場といった公用地、侍屋敷、城代組屋敷、寺院が置かれるとともに、工業的機能の中心を担う町屋が位置する。その中心となったのは鞆町・中紺屋町で、多数の職人が居住し、職種も多様であった。新紺屋町・寄合町・鍛冶町もその副次的機能を果たしていた。内縁部では、町割当初における豎町型プランの名残りがみられる町が多く、ブロックの四辺に間口を向ける屋敷割となっている。これらは地子負担の町であった。

中心部は町屋のみで構成される。ここは、商業的機能の中心であるとともに、宿場機能を担った。その中心は本町で、^{あらまち}新町も副次的機能を果たした。また、本町に加えて、田町・新町が慶長7年(1602)から伝馬役を、寛永9年(1632)から問屋継立を勤めるようになった。商業的機能の中心は田町で、多様な業種がみられた。延宝3年(1675)には、本町・田町・新町に六斎市が設定され、その後、本町・新町は年数回の市立に縮小するが、田町の市は明治期まで賑わう。これらの町では、屋敷割の計画性が強く、奥行きも統一性がみられる。ただし間口の大小には経済活動の反映がみられる。前述のように、本町・連雀町・田町・新町は地子免除の町でもあった。大手門前に位置する連雀町は町割当初の基準となり、この町の役人は惣町の役人の上

に置かれた。さらに、享保6年(1721)、松平輝貞が帰城のおり、惣町のなかで、1.連雀町、2.本町、3.新町、4.田町の順で、扇子を指図しており、これもまた連雀町を第一とする町の序列を示すものといえる⁵⁰⁾。

外縁部は、椿町・弓町・^{しんちょう}新町・十人町といった組屋敷、寺院、田畑が大きな面積を占めて置かれるとともに、商業的機能と工業的機能の混在した町屋が位置する。ここでは、防衛的機能が重視され、組屋敷や大寺院が配されているといえる。外縁部の商工業の中心は、本紺屋町・通町で、無年貢地の磬撃町・職人町以外は地子負担の町であった。職人町以外の町屋は、間口・奥行きとも小さく、複雑な屋敷割となっている。これは、組屋敷や寺院が優先して配置されたためであろう。

総構外には、中山道と三国街道に沿う町屋が位置する。ここは、井伊氏の転封以後に成立した町であり、作人が多い。また、主要街道に面しているために茶屋などがみられ、農業的機能と商業的機能が混在している。これらの町は米年貢を負担していた。町屋は主要街道に面しており、屋敷割には間口・奥行きとも統一性がみられる。

VI. おわりに

本稿では、さまざまな史料や絵図を検討しつつ、町屋地区を中心に、高崎城下町の形成過程とその地域構成を考察した。以下、得られた知見について要約する。

高崎城下町の形成は、箕輪から移転した井伊氏によって慶長3年(1598)に始められ、箕輪から同行した井伊氏直属の町人と在地の町人が統一されて総郭型の城下町が成立した。そして、城郭・侍屋敷・足軽組屋敷・町屋・寺町といった各地区が明瞭に配置され、その後、新たな町屋地区が総構外の主要街道に沿って成立していった。とくに町屋地区については、次の四つの地域に分類することができる。

中山道の内縁部は地子負担の町で、工業的機能の中心であった。中山道に沿った地域は商業的機能の中心で、本町・田町・新町の三つの町が地子免除のかわりに伝馬役を負担した。中山道の外縁部は地子負担の町で、商工業の副次的中心であった。総構の外部の地域は米年貢を負担した町で、商農兼業であった。

高崎城下町では、ほとんどのブロックは碁盤型ではなく短冊型であった。そして、すべての面に間口を持つブロックが、向かい合った2辺のみに間口を持つブロックよりも多くみられた。それゆえ、次のようなプランの変化が推察される。城下町の建設当初には、大手通の方向が重視され、各町はこの方向の街路に面する間口を多く持った。とくに、大手通に面する連雀町は町割りの基準となり、地子を免除された。その後、中山道を町人地の中央を貫くように一筋東へ移動させたことによって、より重要な街路としての中山道に面する間口を持つように、城下町が再編成された。大手通からそれに交差する中山道への主要街路の変化が町屋地区の内部構造の変容を導いたと考えられる。

このように、高崎城下町は、織豊期に全国的に卓越する竪町型のプランから、慶長期にかけて卓越する横町型のプランへの展開を、その空間形態の中に読み取ることができる。そしてま

た、領主の主導によって建設された城下町であり、各町の屋敷割は間口3間とその倍の6間のものが多く、統一性をもって行われていたこと、有力商人を核とした格差のある構造が町相互の序列や屋敷割から見いだされることが指摘できる。

(群馬大学教育学部・京大進学会)

[注]

- 1) 例えば、都市史研究会編(1993):『年報都市史研究1 城下町の原景』山川出版社, 160頁。同(1994):『年報都市史研究2 城下町の類型』山川出版社, 151頁。同(1995):『年報都市史研究3 巨大城下町』山川出版社, 165頁。
- 2) 矢守一彦(1970):『都市プランの研究』大明堂, 247~341頁。同(1988):『城下町のかたち』筑摩書房, 3~84頁。
- 3) 矢守一彦(1972):『城下町』学生社, 13~114頁。同(1970):『幕藩社会の地域構造』大明堂, 144~167頁, 212~244頁。
- 4) 西田美英(1755):『高崎寿奈子』〔高崎市史編さん委員会編(1968):『高崎市史 第3巻 資料編』高崎市, 172~214頁〕。
- 5) 川野辺寛(1789):『高崎志』〔山田武麿・萩原進編(1965):『群馬県史料集 第1巻 風土記編I』群馬県文化事業振興会, 99~177頁〕。
- 6) 土屋老平(1882):『更正高崎旧事記』〔高崎市史編さん委員会編(1968):『高崎市史 第3巻 資料編』高崎市, 285~626頁〕。
- 7) 「高崎宿倉賀野宿往還通絵図面」中村家旧蔵(筆者未見)。ただし、平凡社地方資料センター編(1987):『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平凡社, 393~397頁に、この絵図にもとずく記述がなされている。さらに、根岸省三編(1974):『中山道高崎宿史』高崎市社会教育振興会, 244~256頁に、本町から新町^{あらまわ}までの職業と名前を活字にしたものが収められている。
- 8) 「間部氏当代高崎絵図」鯖江市万慶寺蔵〔高崎市歴史民俗資料調査員会編(1988):『高崎史料集 間部家文書』高崎市教育委員会, 口絵〕。
- 9) 「高崎城内絵図」土方家所蔵〔高崎市歴史民俗資料調査員会編(1988):『高崎史料集 藩記録

- (大河内) 1』高崎市教育委員会, 口絵)。
- 10) 「高崎御城下町並寺社境内等巨細絵図」土屋喜英氏所蔵。以下では「高崎城下町巨細絵図」と省略する。
- 11) 「上野国群馬郡高崎御城内外持場惣絵図」土屋喜英氏複製・所蔵。以下では「高崎城内外持場惣絵図」と省略する。
- 12) 「高崎城下絵図」堤家所蔵〔群馬県史編さん委員会編(1978):『群馬県史 資料編10 近世2』群馬県, 口絵。村井益男編(1981):『日本城下町絵図集 関東・甲信越篇』昭和礼文社。群馬県立文書館編(1988):『上州の城と城下町絵図』群馬県立文書館, 9頁)。
- 13) 玉井哲雄(1989):『都市史における都市空間研究 (高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』東京大学出版会), 131~150頁。
- 14) 高崎城下町を取り上げたものとしては、箕輪からの移転やその地域制について明らかにした次の論文がある。
- 上原 徳(1935):『城下町移転の地理学的研究 一特に高崎に就いて一』大塚地理学会論文集第5輯, 191~224頁。
- 15) 中島義一(1977):『7. 関東(2) 都市(藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説 近世編』吉川弘文館), 245~252頁。
- 16) 『高崎志』には、和田城下の大道は、今の赤坂門より二の丸を経て、三の丸の南東部にあった興禅寺の西を廻る、とある(前掲5) 112頁)。この街道の位置関係から、かつての和田宿の位置やその東にあった城郭の大きさを推察できる。
- 17) 例えば、松平輝高の時、群馬郡72か村の石高は4.38万石、その他の上野国内の石高が1.13万石、国外の石高が3.22万石となっていた(合計値には物成詰高を含む)。
- 高崎市歴史民俗資料調査委員会編(1987):『高崎史料集 大河内家文書(無銘書2)』高崎市教育委員会, 441~443頁。
- 18) 前掲4)~6), 14)のほか、群馬県史編さん委員会編(1990):『群馬県史 通史編4』群馬県, 103~137頁, を参照した。
- 19) 図2~図5の縮尺と方位については、内堀を基準に求めた。
- 20) 『高崎志』には、連雀町について「慶長三年城下町割ノ縄張アリシ時、最初ニ此町ノ所居ヲ定メ、其ヨリ南北総町ノ地割ヲナセシト也、其時標ニ立タル大石、近キ頃迄街ノ北角ニアリ」とある。
- また、関が原の戦いのとき、連雀町は、城主より槍や具足を与えられ、城下に異変があれば民兵を率いるよう命じられたという(前掲5) 131~132頁)。
- 21) この和田宿町人の移った^{あらまち}新町と組屋敷からなる^{しんまち}新町については、その都度ルビを振ることによって区分していく。なお、本稿で用いた町名の表記は『高崎志』に準じている。
- 22) 『高崎志』には、土堤には松・杉・榎が植えられていたが、今は民家が多くなり、土堤がなくなった。ただし、通町の南から職人町の東に土堤が残るほか、通町から椿町の北に竹木が生えるところがある、と記されている(前掲5) 114~115頁)。
- この「遠構」は、高崎駅付近には明治期まで残り、堀の幅約6間、土堤の幅約9尺の規模をもっていたという(前掲14) 213頁)。図1をみても、中山道鉄道(現JR信越本線)の西側に水路が認められる。
- 23) 矢守一彦編(1974):『城郭図譜 主図合結記』名著出版。
- 24) なお、このときは、北爪九蔵のほか、本町の反町・梶山・須藤が供をしたという(前掲5) 136頁)。こうした地侍の存在は、兵農分離が十分でなかったことをうかがわせる。
- 25) 前掲6) 463頁。
- 26) 上番が1~14日で本町、中番が15~22日で田町、下番が23~晦日で新町となっていた。また御定馬50疋は、本町・田町が17疋、新町が16疋で、若干の負担の差が見られた。
- 27) 近藤 章(1979):『高崎町数度の大火の控え、群馬文化182, 9~17頁。
- なお、明治8年(1875)の高崎宿の戸数と人口をみると、士族807戸・3,524人、平民2,853戸・9,954人で、高崎在住の家臣団の規模は相対的に小さかったことがわかる。
- 萩原 進監修(1980):『上野国郡村誌5 群馬郡(2)』群馬県文化事業振興会, 195頁。
- 28) 西村睦男(1980):『藩領人口と城下町人口、歴史地理学111, 1~15頁。

- 29) 高崎市歴史民俗資料調査委員会編(1988):『高崎史料集 間部家文書』高崎市教育委員会, 20, 27, 48頁。
- 30) 安国寺は慶長6年(1601)に佐和山に移り, 石田三成にくみした安国寺恵瓊の名を忌み, 宗安寺と改称。
前掲6) 594, 596頁。および, 平凡社地方資料センター編(1991):『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』平凡社, 813, 822頁。
- 31) これらの町は, 総構外の常盤町・新田町・南町・新喜町を含めて, 「城下堅町通り筋拾ヶ所」とされ, 主要な町通りとして認識されていた(前掲17) 406頁)。
- 32) 元禄16年(1703)の「往還通絵図面」では, 旅籠屋は本町に34軒, 新町に6軒(うち1軒は荒物屋との兼業)を数えた。
- 33) 前掲4) 182, 189頁。および, 安政3年(1856)「高崎他四ヶ宿盛衰并助郷内調書上」〔群馬県史編さん委員会編(1978):『群馬県史 資料編10 近世2』群馬県, 593~594頁〕。
- 34) 前掲5) 131~132頁。
- 35) 元禄16年(1703)の「往還通絵図面」では, 作人は赤坂町15軒, 本町11軒, 田町8軒, 新町21軒, 新田町28軒, 南町28軒で, 総構外の町にその割合が高くなっている。
- 36) 嘉永5年(1852)「高崎宿明細帳」(前掲33) 550頁)。
- 37) 年不詳「高崎町方私記」〔高崎市歴史民俗資料調査委員会編(1988):『高崎史料集 藩記録(大河内1)』高崎市教育委員会, 453頁〕。
これは, 町方役所の例規集で, 文化11年(1814)以降の成立とされる。
- 38) 前掲37) 448, 452~453頁。

- このほか, 惣町の負担する御城役には, 春秋用水浚い, 牢屋普請, 聖石橋・町方木戸橋道繕いに関する人足の差し出しがあった。
- 39) 安政3年(1856)「高崎町割古記録控」〔群馬県史編さん委員会編(1978):『群馬県史 資料編10 近世2』群馬県, 267頁〕。
- 40) 前掲37) 445頁。
- 41) 前掲37) 448, 453頁。
- 42) 前掲5) 155頁。
- 43) 前掲5) 132頁。前掲6) 433頁。
- 44) 前掲5) 132頁。
- 45) 前掲5) 158~159頁。
- 46) 堅町・横町の類型については, 前掲2)のほか, 次のもので論じられている。
足利健亮(1984):『中近世都市の歴史地理』地人書房, 221~230頁。
宮本雅明(1993):城下町の類型—縦町型から横町型へ—(高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』東京大学出版会), 172~173頁。
- 47) 前掲39) 262頁。
- 48) 前掲6) 329~330頁。
- 49) 前掲37) 450頁。前掲39) 267頁。
- 50) 前掲39) 259頁。

〔付記〕

本稿は, 奥土居の提出した1994年度群馬大学教育学部卒業論文をもとに, 新たな資料の収集とその分析を加えて関戸がまとめたものである。

本稿の作成にあたり, 絵図閲覧の便宜を図っていただいた土屋喜英氏, 高崎市史編纂室にお礼申し上げます。

THE DEVELOPEMENT AND REGIONAL STRUCTURE OF A CASTLE TOWN: A CASE STUDY OF TAKASAKI

Akiko SEKIDO and Hisashi OKUDOI

Castle Towns in Japan have been taken up as a typical planned city in the feudal age. The types of the change in the regional structure of castle towns and the block pattern in merchants' and craftsmen' residential district (*machiya* district) examined by Yamori (1970, 1988) have much contributed to the studies of castle towns. The aim of this paper is to delineate the developement and regional structure of a castle town, Takasaki, focusing on *machiya* district. For this purpose, the authors examined various historical materials and maps.

Takasaki castle town was a central place of the province of Kozuke in the Northwestern area of the Kanto plain. Its development began in 1598 by Ii family who moved from Minowa castle town. And also the important merchants, craftsmen and Buddhist temples moved with Ii family. The whole town which contained farm lands was enclosed by the moat and embankment. Similar to most castle towns, Takasaki castle town had the following spacial constituent elements: the castle, warriors' residential district, lower class warriors' residential district, *machiya* district, Buddhist temples' district.

Since that time, the districts of Takasaki castle town were more sharply arranged, and new *machiya* district was established along the main streets (Nakasen-do and Mikuni-kaido) outside the outer moat and embankment (Fig.2, Fig.3 and Fig.4). *Machiya* district which was composed of individual *machi* could be classified into the following four areas:

The inner area of Nakasen-do (one of the five main roads in the Edo era) was the core of manufacturing functions, and paid land rents. The area along Nakasen-do was the core of commercial and trading functions in fief of Takasaki-han. In this area, three *machi* Moto-machi, Ta-machi and Ara-machi, bore the carrier and horse-obligation instead of being exempt from paying land rents. The outer area of Nakasen-do was the secondary core of commercial and manufacturing functions, and paid land rents. The area outside the outer moat and embankment was residence for merchants and farmers, and paid land tax in rice.

In Takasaki castle town, there were two patterns of blocks in *machiya* district (Fig.5). Most of the blocks were rectangular rather than square in shape. These blocks were divided into each residence. It was clear that the blocks which had the fronts on all sides were more numerous than the blocks which had the fronts on the two opposite sides only. Therefore, the authors could point out the following:

At the beginning of construction of the castle town, the direction of the street arriving at the main gate of the castle (Ote-dori) was of great importance. Each *machi* had the fronts facing the streets of this direction. Especially, Renjaku-cho which faced Ote-dori was exempt from paying land rents. After Nakasen-do was replaced, each *machi* had the fronts facing Nakasen-do as the more important street. The change of the main street from Ote-dori to Nakasen-do crossing it led to the transformation of the internal structure in *machiya* district.